

日が沈んだ後、昇る前のお話

空が、赤い。

夕焼けのそれではなく、血の色、死の色。

その広野は、乾いた色合いの禍々しい赤で塗りつぶされていた。

死屍累々と横たわるのは、武具を身に纏った兵士たちが、人魔入り乱れて。

合戦後に死肉を喰らって肥え太る蟲どもも、今はきつと寄りつかぬに違いない。

屍の山の中、生きているものは——いた。

遊び疲れた子供のように、手足を投げ出し転げた黒髪の少女。

輝ける鎧甲も、聖なる剣も、愛らしい容貌も、傷つき血と泥にまみれ、くすんでいる。

「……やつぱり、きつついなあ……」

ただ、その声だけがまだ死んでいなかった。

彼女の声に応じて、傍らに横たわる死体と思えた女剣士、そして術師が身を起こす。

剣を支えに、杖を支えに、崩れ落ちそうになる膝を叱咤しながら。

「だから言ったではないですか。初手から全力はやめると」

「これだから貴女あなたは短慮たんりょで困る」

「ごめん」と、叱しかられた少女は笑い、それから顔をくしゃりと歪ゆがめた。

「……ていうか、正直泣きたいや。痛くて、つらくて、怖いし、逃げたい。もうやだよ」

「ああ」

その今にも泣きそうな声に、剣聖はゆつくりと武器を構えて頷いた。

「夏が過ぎたら、村でお祭やるんだ。二人と遊びたいのに、何でボクこんなところにいるんだろ」

「うん」

その震えて弱々しい声に、賢者は記憶した呪文を呼び覚ましながら頷いた。

「他の人も、そうだよね。……一緒にいたい人がいて、やりたいことがあって、みんな」

咳つばいた少女は、疲れ切つて重たい腕を動かして顔をぐしぐしと擦こすった。

目を赤くした彼女は、精一杯の力をこめて、聖なる剣の柄つかを掴つかんだ。

死んでいたはずの刃は、少女の生命の光を受けて、活き活きと輝き始める。

不死鳥のように——太陽のように。

「いつものことだけど、負けらんないよね……ボクは」

「我々だ」

「私たち」

そして、勇者は立ち上がった。

えへへと照れたように笑う彼女の脇を劍聖が固め、後方では賢者が気を研ぎ澄ませる。目前にはこの世全てを塗りつぶし、覆い隠さんとす強大な影。魔神の王。

誰も彼も満身創痍。精も魂も尽き果てて、勝敗なんか始める前からわかっている。

「手番渡したらやばいね。ボクから始めて四手でとどめ」

「初撃で一太刀足りないなら私が補い、以て魂魄を破壊します」

「続けて私が《加速》の術で貴女を再行動。戦乙女の声がありますように」

「そんでもってボクが世界を救う！」

——そうとも、負けてやる気なんて欠片もない。

勇者はにいと口元の端をつり上げ、大胆不敵に笑う。獲物を喰い殺す鯨の笑み。

両手でしっかりと握った聖剣を高らかに振り上げ、太陽の光を纏い、彼女は吠えた。

「夜明けの、一撃いっ!!」